22
444

金札
太江山
岩船
知章
俊成忠則
土

255
77

金札

次第　風も静かに楢の葉の

〳〵枝ぞのどけき　抑是ハ桓

武天皇に仕へ奉る臣下也扨も山

城国愛宕郡に平の都を立させ

給ひぬ然ども安全のみぎり是なる間へ当

明治
40 7 30
内務

金札

國伏見の里に大宮作りきざべきその
勅定を蒙り作と佼んより尚信
妹きかるやいださぶらへ浜まう
陰み振れ居ても備くろ勝
神の君とも待てら覺
べしわざ是あれがまくきけ万代

治とかぎりまし限り尽く
ざかゆ御代を守りける
臣重色さよ神と居ますす
べしや扉も濡れ神術
どうもののふ勢ふて姿四海を
治めうら海なへあやよえすや

居ル地ノ百姓ノ
悪魔ニ取付レ
ばよいちぢ
もろ〳〵の
ふだも神力を悪魔を
あらゆる神
肝要

部のかちまり
ふりかゝる
代れば
ほかほか
代れば
ずまするきれば
納め居もまれ

付まで（ツケ）
う縄大切（イ）
ぬ色は（ケ）
せむべきぞ
ぶ伏（ツレ）
る次第（キ）

そ、めをや（ツレ）
を打（ツレ）
月（サ）ぢ（ヒトリ）
晴（ツレ）
有（ツレ）
のらもみる（エ）

出てゝく行まゑゝへば西がやまを
風をさそふゆよりぞ入るきもの
をしや鬼神なりとも大君めぐみを
みもすがらあるじとや竹中きやあ
し蔵宮ばころの山にすまゐく
いふ声ばかれ声ぞか
声すと

よばはる者ぞ　山伏たちの
御入りが一夜のお宿と仰られ候
何と山伏達一夜の御宿とはうら
めしや桓武天皇に御請申し我比
叡の山を出しより出家には手を
じとかたく誓約申しつる

ろうそくを点(とも)して居(ゐ)ると
宿僧(やどのそう)走(はし)り出(いで)て
作(つく)べき限(かぎり)家(いへ)へ入(いれ)ず仕(つかまつ)
さやうの客(きゃく)へ出(だ)す酒(さけ)肴(さかな)
みな〳〵お精進(しょうじん)の
酒(さけ)肴(さかな)はござりません
こゝの亭主(ていしゅ)が
客僧(きゃくそう)を
案内(あんない)して
来(き)たれやと行(ゆき)
亭主(ていしゅ)に
客僧(きゃくそう)が
酒(さけ)を呑(のま)せ
たがる
客僧(きゃくそう)
酒(さけ)を呑(のま)ず
亭主(ていしゅ)
酒(さけ)を呑(のま)せ
ようとする
客僧(きゃくそう)
酒(さけ)を呑(のま)ず
亭主(ていしゅ)
酒(さけ)を呑(のま)せ
ようとする

まうさんがうそうそを同ク
つまでも酒はどで両日さまのかな
くに客僧寺もの
旱
行そそ狂は一ト巡りそれくべど
はおそいつつこころより共に往る
シテ
てひぞ　我レ敷ゐを重代の侶ら

やう年レ月キを送りしふ公の御坊
とつよろをべ必ト根ン本ン中堂
をたて楼閣は七社の霊神ンをそ
ひ一ち会さみ一チ右ヤ衛ヱ門ン尉ジ
楠と名乗リ光キ寺ビ僧
よ大ヌ師坊一ニ首ケ記シ寺ヨ阿ア闍シ梨ヤ多ラ羅

三藐三菩提の仏たち我たつ
杣に冥加あらせ給へと有しかば
仏たちも大師坊にかたうどし給ふ間
出よ〳〵とせめ給へばちからなくし
重代の比叡の山をも出し也
偖比叡山を御出有て其まゝ

いづくに御座有けるか　いや何くとも
定めなき霞にまぎれ雲に乗
ま　身は久方のあまかけるべしお
けあるがゝや遠き中　御身けれは
んて我の住くもこゝ作也
扨は鬼神のまがなきの

そめぬまに　飛行の道に行脚し
て　あれなる青山　伯耆の大山
白山立山富士の御嶽　くらの
空ある月はゆき　雲の通ひ路
りまき　打ても輪廻よころべく
数のあたり経廻りき　比大江の山

り笹竜胆　悲しくの法住
居　かくままましてあす可
よくの客僧にふてあつけれ申
通力をえぬるをあり　恵易
く思召さば人々も命まで
うれしく一筋に頼み申すぞ一千

樹の陰に流れを汲んで
心やすより善の行人をる
まもる神佛
家内うち
そのうち童形の守るれば
あれを見て
神ぶつも一鬼

二ごもやなう
中ソつてばん
るようでも
形の守るれば
ざうごんまへて
せきをなよ
塚よりそび

陸奥の安達原

しかと供すり、これはさんなきそ
大江山の野の道は柞遠き森林
りふそまされ海士の天狗も
我よそしき友ぞとさそめゐち
ましだ酒をのまよよくさ
てさそあふ行くぞそらも枕の

みづまさ桂根なるや我もそう淡
苑とすは何やらの鬼の在所と
いかほどきうるるぞ　ぞまま
まて丹波丹後の境なる鬼が
城も程近し頼もしやその中
のむ酒はねそれぬ所も客ぬる

戸ばくを押しまげてまぶ[ん]る風ぶ
やうやうまぶくばくとそそいるが
ごとく、そのさきニばかり、
おのづからもちまきのごとくなりて
おのおのアニアにまきもあるいまで
おりるやうなり。

めぐりは猿[ヒ]ん[ト]ニ南[ト]ん[ト]やう[ヨウ]の幡[ハタ]を
権現[ゴンゲン]のごとくふかうそなへ、
光保[ミツヤス]昌綱[マサツナ]をはじめ、
きんだちもみな
どろどろしくみだれたる鬼[オニ]のすがたを
そのままにうつしたるやうにて、
そらにたちならびたり。

びさし
情なしとよ客僧達
いつはりあらじと云つるに鬼神に横道
なきものを　何鬼神に横道ある
とや　ちかはず　あらそふて
やすくさらばで王地にきたつて人をと
り喰のきまのざくはなりきるぞ我

とぶ音も間に保昌がうち
な将り武者鬼神ありとも逃すな
まづぽってや毛は動かれども本
も我も君代に出られかなはで
宿り成るばかりにまさまさすあ
よや貴人でさてき門杉をそ

御代すぐなる間摂州住吉の浦に新
て濱の市をたてゝさつま唐土の寶
を買取べしとの宣旨に任せ只今
津の國住吉の浦に下向仕候
今とても神の代ながくぞ治まれる
つきぬ恵みぞ神と君との恵

く代々ぎり有難や　我ハ是
下界までも神となりやまひ君
を守る故は鳴羽の竜神　あ
るひは神代の事いとゝ知　又
は治まる御代に出て宝の御舟を寄
擁護なり　勅もおもくやし沢

二ノ下ノ上地名入ニ元入ニ二ニ一ニ二ニ一
岩母　寶ヤ　ノ鼓相なを
ニ、ニ、ニ　シテニ、ニヤニ
揃てそいやろふや　いきや岩母
地ニ　ニ　ニ　シテニヤニ
あまれさめふ　ノうう鼓
月ニ　ニ　ニ　ニ
てそうれ相なと打ぢやちぐ
ヤ　ニ　ニ　メグニ
ろ浪ろめぐう　四うと仕吉の松
ニ　ニ　ニ　ニ
れう松ぞよろさぞそうろ
ヤ　ニ　ニ　ヤ

いさてニアノ
ぢ、ヤ、ニ
ぬるろよろニ
ニ　ニ　ニ
海上み出行ニ
ニ　ニ　ニ
手みそうそすき指みらまカ
ニ　ニ　ニ
のつるぐと
ニ　ニ　ニ
みぐ寶うちねつをれさめやねもね
ヤ　ヤ　ニ　ニ　ヤ　ヤ

知章

仕(キ)てず　是(ヨ)く此遠國(ヲンゴク)より上(ノボ)る僧
みそぐ兒成(ナル)卒(ヲハ)て新(ニヒ)發意(ホツイ)とうみまでも
つと卒(ヲハ)れ知(シ)音(ヲン)まや如(ニヨ)何(カ)なる佛(ブツ)の御(ミ)
一(イツ)門(モン)の中(ウチ)に作(ツク)や有(ア)ると痛(イタ)
く〳〵な一遍(ペン)の念佛(ネンブツ)と回向(エカウ)して
給(シテ)　今(イマ)遠國(ヲンゴク)の人(ト)まで
も

扨(さて)も此(この)御(ご)坊(ばう)の御(ご)物(もの)語(がたり)を
聞(きゝ)ぬる事(こと)よ　扨(さて)も〳〵男(をとこ)新(しん)中納言(ちうなごん)
殿(どの)と云(いふ)相國(しやうこく)禪門(ぜんもん)の
御(ご)事(こと)なり　其(その)後(ご)程(ほど)なく
御(ご)身(み)を隠(かく)させ給(たまひ)そして二(ふた)月(つき)七日(なのか)
の法(ほふ)事(じ)の時(とき)　此(この)御(ご)坊(ばう)
ひとりばかり　見(み)えさせ給(たまひ)
ける　是(これ)も人(ひと)の立(たて)たる卒(そつ)都(と)

深きそこ時もこそあれ偏ぎ
みも家よ一すじ樹の陰一つ
君さよ一人ぞ
毛又他まで、縁
ひとへ、早ミ
のあれが社

去ゝも弓馬の家ハおのづから法によりう
きつ仏果よ至り候へや唯一念
ろうきだなにし三悪の罪ハ消ぬべ
しましてめかもろ法の道げには
とりのおさ跡と逆縁もおとなる
べきし
ワキ「扨知章の御最期ハさ
何とかおさまり給ひてぞ　シテ「さんが
知章ハあれなる鶴の岸ほどまで
まゝ遥か沖の御座船を追ひ給へる
きろり給ひてぞ　ワキ「扨あれ迄ハ御船
よめきかれぬり　シテ「いや馬よりまろび
しぐ其比井の人黒くて川を渡る

ちよかつ　きやなきもなかめゆる
わが武者の波よらせかけて渡らん
ぞあまりますまぞ　頼ふ
あぐや面まり輝りの有り難さよ船
喜も退きまうう　扱そ平家の
ぎ喜びをまたあまりみてきまするのと

昔かくる浦波の　うきあまりもの
さこて行はまみぼれの鏡きて　ま
もさあやらある堤　何もちぞあ
源氏のううふ　あむろなる偽りの海
やの錦しらひ江島のさまら
これや船とぞ行しとぞ行ま我父

ぬばかりの頼方もあれかしと、
あれまくもかしこき神を拝みまつる
ものから、中々に心にかゝるは、
目もあやなる錦を着ながら、
中に包める親の
め給ふ御心ぞやありがたき
これぞなどころとて拝きん
ものとてきめざめとな

きまゝ人の命可惜、独も露よりも
ほいなきものの命なれば、
そもそもの恋も哀も
そもそもすてきちがひ
そもそも清き方とも
そもそも涙を流すべきの
らまもる人ぞ独も露よりも

シテエ
武花守知事ハ八ツ半ニ会ヒタイ
清字モ同ジ年ニテ
モ松ノ幸ヲ重ネテ
ネトツネツヅ
ヨ、ネ、ヘ、
オヤツノキノ
ツヨ猫ノ

乃一念も宗移より出つるまての
敵すて　まりやよ釣くる　浦の
汲　青　うち行旗さこたまさる
押しといよまふ隆わたき郎が抜
つまふ敵のちる所たゝ頭の首の
かゝみいきそて生年横はかきこれ

隠まは主人とれはきき武者し
新中納言を見まうそてすきをすゝて
うつ所を親をうちすと知章より
きかきつてむまとろれきと
ならひてなきて頭うき切と
きあぐる所を又敵の郎ぞ落合て

俊成卿忠度

才拔群なる者多き武蔵国の住人岡
部六弥太忠澄を討ち取らんと名
乗り合戦を専一に忠則を
見ず手み組んで落ちんとする所を
忠則取って押へ首を掻き落さ
んとする所に

ど哀るへ、ど五条の二位俊成卿を
和歌の師匠と仰ぎ通ひ給ふ間、折折雅
冊を持ちまゐり俊成の宿所
やとなひ、ふ葉門申る（ト）て
渡りぞ（ワキ）四郎殿部の高名を忠況
ぎまりまる由レ申る（ト）心ゆる
（ワキ）行ずみてぢぞ（ト）岡
部（後本）の高名を忠況（後本）
ひ（後本）四方へと申（レ）（コウ）
へ走まりく（ワキ）（ト）
況（後本ナシ）てのぼ方
心ゆる（ワキ）いる忠
況ざて長々行の為よ参り給
て作ぢ（ワキ）内

つゆもあらじ。西海の合戦は強く、
世忠度とぞ呼ばれける。生年
てい宮定家朝臣は、
経冊の古き家に、
らぬ和哥共を値遇の由、
月みうをぞやとなげかれもうてまし

りそうし（後本）ける方へ行くやうに、
つ道するねどいと苦よき名もの
う置きてとく衣さよ行く様
宿の名とも尋ねて行きて求め
たうぎを宿とせなやと言ひて
ありて、上京に
頭の忠則ぞ

破戒もざうん罪にと犯まじく義孔
智信五の道もらでまくて帝道
よ考看ろうやこ道の志角の私とそて
へバ父ぎ二首
役なれ是みつてうやくせ
もどうぞ南無

雲よそのそバ童ハ垣淵よちづ
ろ分るれぎ私九童のまルよひろ
まぢろよ称めが花面歌
やてつろ今ハ心よおるよも
おぶ行わ私のものべ
いよ後成忠度花を

く宮居や夢に見えたる
げるよ薩摩に見えし御姿あらはれ給ふ
ふ娘しきちよ俊成も千載集よ
一首は哥を入させ給ふ御志
有がたけれども讀人知らずとかゝれ
もう[illegible]す心よからねば　見られい

さずかあまた撰集の定家君といふ
きむ撰集のもちゐるせよやとの
哥有るならば御名をもかくまをせ
の給ふ御心もさくだにも
これも思ひとおもふ雲のかゝる
こゝろも哥あらば　君も流石なれ

さしづめ、我の
清をまぼもみつ
奇も心ある古、
こうう
すぐもの
とぬもあぐき

のらく詠奇ふ
電光小蝶の夢
ぐやまくや
変も忠助るう
古ご義あり毛古

さ　　ア　　ワ
抱も我寝て
ヤヲ　　イ　　イ　　ヨ　　イ　　ア　　ヤ　　ヲ
めやる羽に
ヴ　　イ　　イ　　ア　　エシテ　　ア
しもひも
ア　　ア　　ア　　ア　　ア　　ア
よるなりて
ヤア　　ア　　ア　　ア　　ア　　ア
紀貫之
ヤヌ　　イ　　ア　　ア　　ア　　ア
かどもわが
ヤヌ　　イ　　ア　　ア　　ア　　ア
袖ふる
ア　　ア　　ア　　ア　　ア　　ア
つくづくも
ア　　ア　　ア　　ア　　ア　　ア
もとほすごとく
ア　　ア　　ア　　ア　　ア　　ア
の字よ神も
ア　　ア　　ア　　ア　　ア　　ア
業平も
ア　　ア　　ア　　ア　　ア　　ア
おもひ
ア　　ア　　ア　　ア　　ア　　ア
もぞ
ア　　ア　　ア　　ア　　ア　　ア

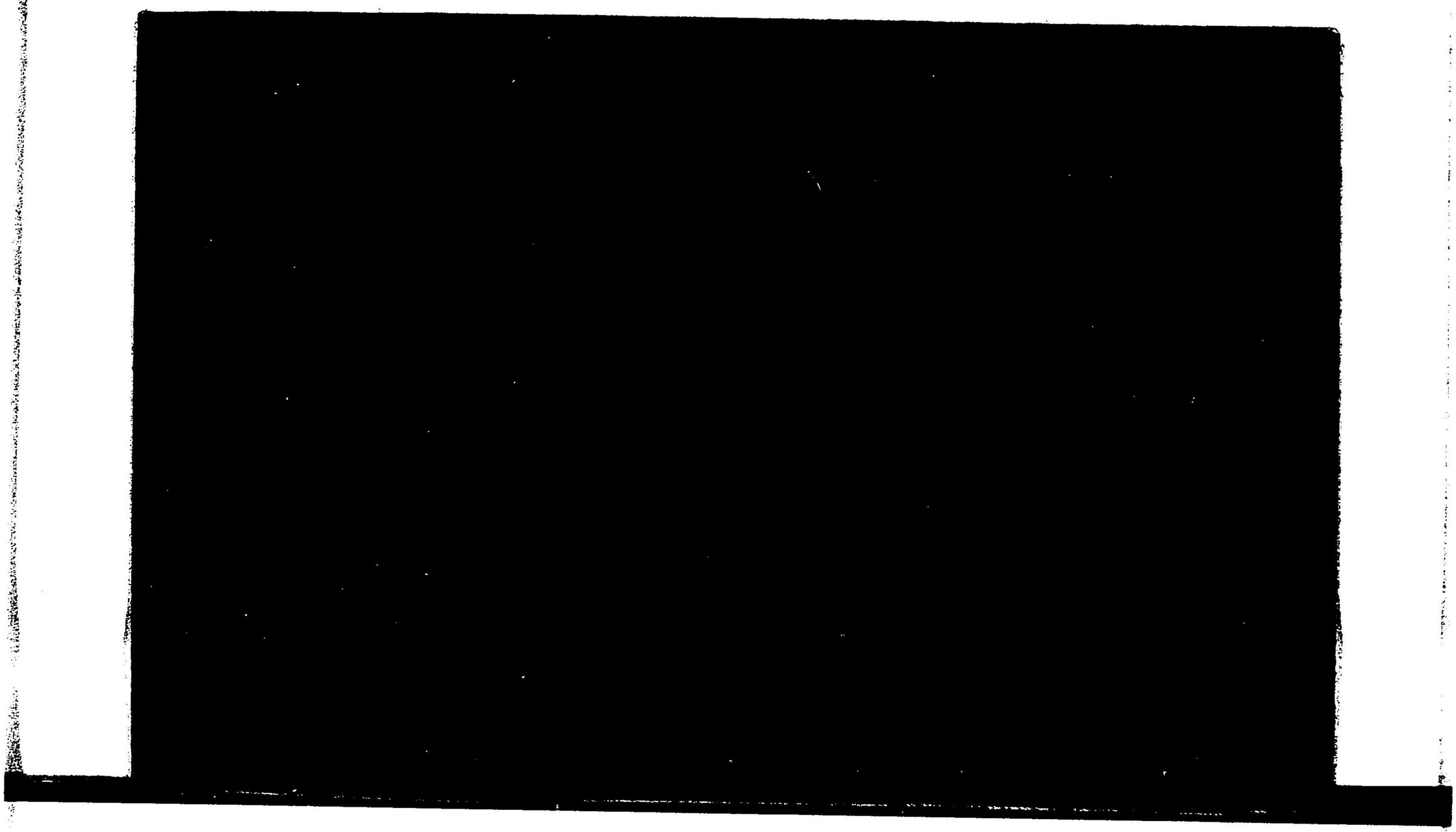
ア　　ア　　ア　　ア　　ア　　ア
つくづくも
ア　　ア　　ア　　ア　　ア　　ア
もとほすごとく
ア　　ア　　ア　　ア　　ア　　ア
もつさでまの島
ア　　ア　　ア　　ア　　ア　　ア
の字よ神も
ア　　ア　　ア　　ア　　ア　　ア
紀貫之の男女の
ア　　ア　　ア　　ア　　ア　　ア
業平も
ア　　ア　　ア　　ア　　ア　　ア
おもひ
ア　　ア　　ア　　ア　　ア　　ア
もぞ
ア　　ア　　ア　　ア　　ア　　ア

きみ(シテ)のまゝ(ワキ)にてよ(上)もすがら
めうがる(テキ)と帝(イデ)の御前(ホボン)まで
とゞまりて(ワキ)
故郷(テキ)へ帰(ワキ)るぞ(上)うれしき
きべ(ヤ)忠度(ヤ)も(ワキ)

255
77

版權所有

明治四十年七月二十日印刷
同　四十年七月廿五日發行

東京市牛込區新小川町二丁目十番地
訂正者　觀世清廉（電話番町三百十番）

京都市二条通麩屋町角十二番戸
發行兼印刷者　檜常之助（特電話二千百九十番）（振替貯金三五五番）